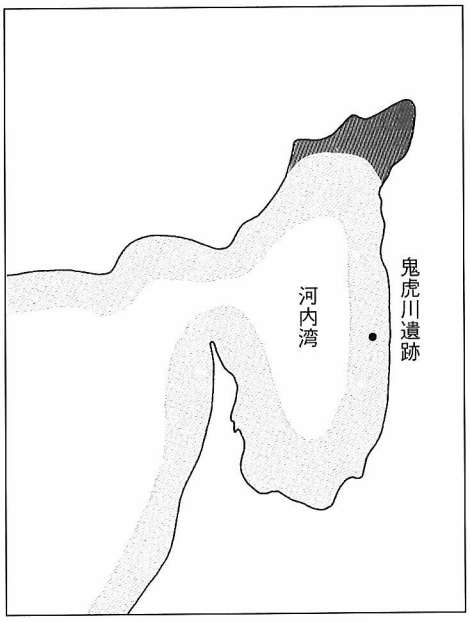
2．縄文海進と河内湾

1　縄文海進と河内湾

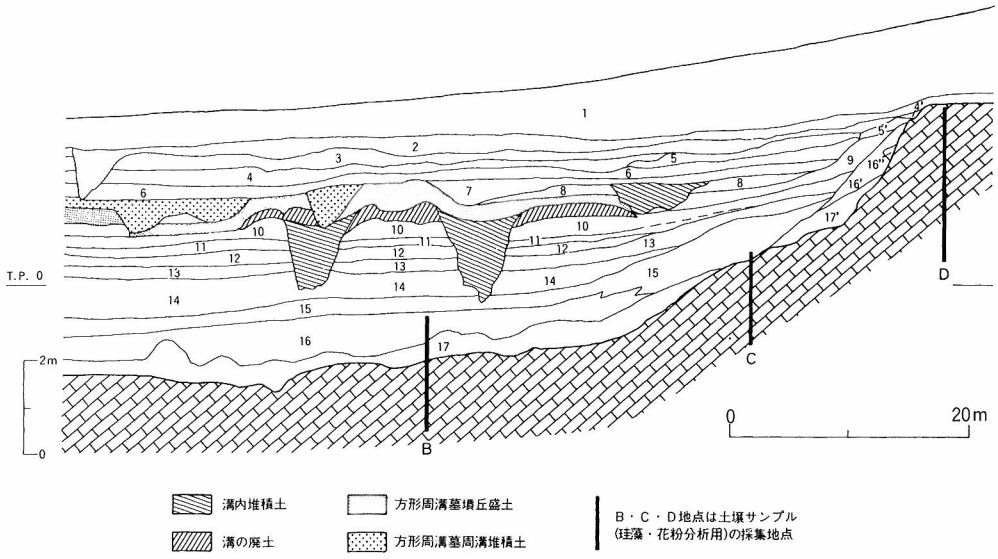
2万年前のウルム氷期の最盛期に、大きく低下していた海面は、その後地球が温暖化していくとともに、陸地にあった氷が融けて海に流れ、海面が上昇して陸地の奥深くまで海水が侵入していった。6000年位前には、海水面は現在とほとんど同じか、少し高いぐらいまで上昇し、生駒山の麓まで、つまり河内平野もすっかり海水におおわれてしまった。南北に伸びる上町台地が半島のようになって河内の海と大阪湾とを隔てていた。

このかつての内湾は河内湾と呼ばれている。北は高槻市から茨木市、南は八尾市の南端近くまで海水の侵入が見られた。

東大阪市布市町からは体長11m以上もあるマッコウクジラの骨、西石切町の鬼虎川遺跡でもクジラ、イルカ、サメ、フグ、サワラ、スズキ、アカエイ、シャミセンガイなど海棲動物の骨が見つかっている。



▲河内湾模式図



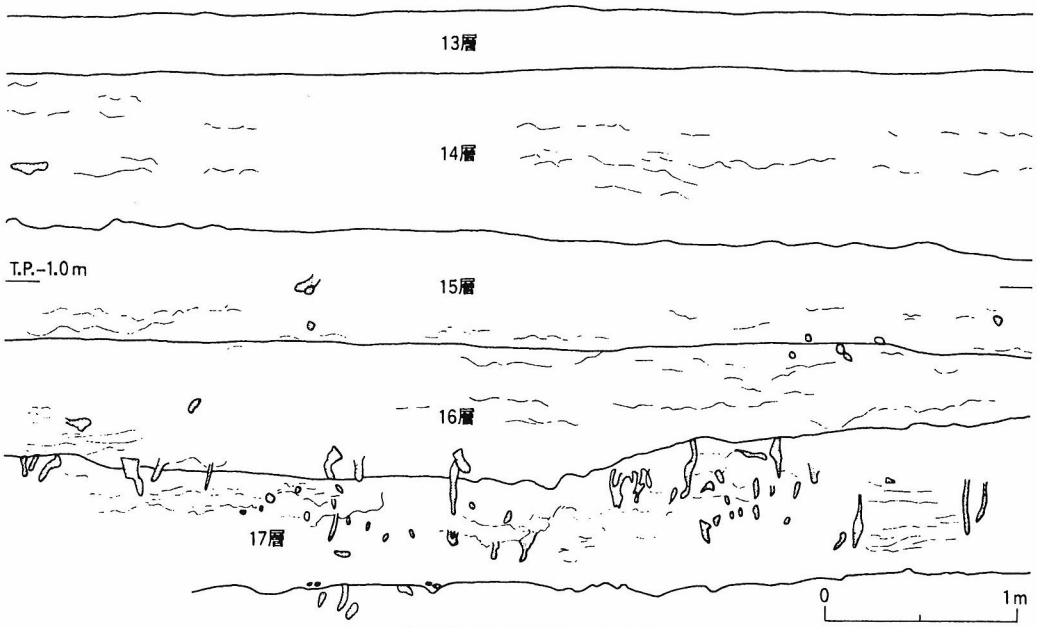
▲鬼虎川遺跡第32次調査層序模式図

◀海成堆積層

2　鬼虎川遺跡の海成堆積層

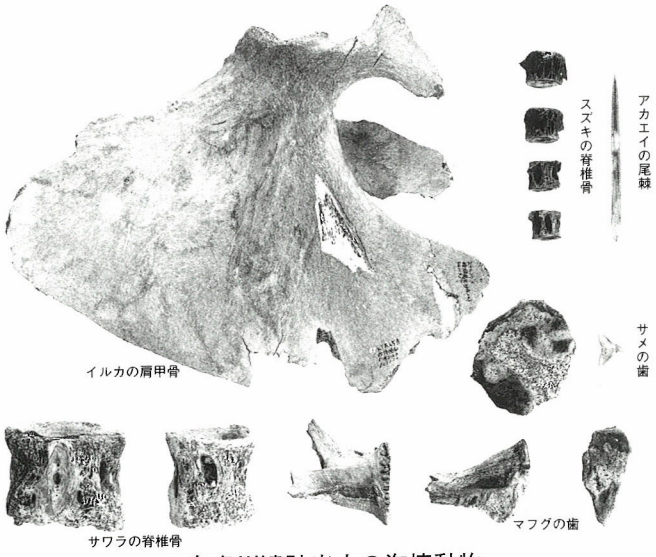
海成堆積層は大きく4層に分けられる。最上層は暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルトで、厚さ30～100cm、微量のシャミセンガイ、少量のヌマガイ、サメの歯、アカエイの刺が、上層は灰色中粒砂～極細粒砂混じりシルトで、厚さ20～40cm、縄文中期の土器が、中層は灰色礫混じり細粒砂～中粒砂で厚さ40～60cmで、ここからはたくさんのシャミセンガイ、スズキ、クジラなどの骨、縄文前期の土器が、下層は灰色大礫～シルトで厚さ20～100cm、たくさんのシャミセンガイ、サワラの骨などが出土した。

河内湾の海退期に入っていて、激しい沖積作用と相俟って堆積層が下層から礫(大礫～中礫)、礫混じり細粒砂～中粒砂、中粒砂～極細粒砂混じりシルト、極細粒砂混じりシルトと変化している。これは海退による波の営力の弱化、沿岸州の形成による静水域への変化が考えられる。



▲A地区海成堆積層と生痕化石

▲海成層（第17層）出土の縄文土器



▲鬼虎川遺跡出土の海棲動物

3　縄文土器

縄文土器は、前期の北白川下層式・大歳山式が多く、次いで中期の船元Ⅰ・Ⅱ式、後期の中津式・元住吉山式、晩期の船橋式が出土している。北白川下層式は、口縁部が波状形で、端部と口縁部のすぐ下の２条の凸帯文上に刻み目文を綾杉状に施している。体部の上段に左撚り縄文、下段に右撚りの羽状縄文を施している。また、内外面を貝殻条痕で調整した土器もある。

その他、石匙、敲打具、削器などの石製品やサヌカイト片が出土している。摩滅もほとんどみられず、動植物遺体と共に出土したことから波打ち際に埋没した状態を示していると考えられる。これらの土器を残した縄文人は、海に隣接した低位段丘上に居住していたものと考えられるが、現段階では未発見である。堆積土中より土器が出土したことから海進の時期、堆積の状態、湾から潟への変化の様子などを知ることができる。